

不妊分科会議事録

厚生省心身障害母体外因研究・不妊分科会の第1回の打ち合わせ会は慶大・飯塚理八不妊分科会長のもとで、昭和54年7月18日(水)、午後2時より、東京・新宿、京王プラザホテル42F「御嶽の間」で班長・東北大・鈴木雅洲教授、小林隆・沢崎千秋両評価員、厚生省より川口・稲葉両課長補佐、東大・大野虎之進教授、帝京大・和久正良教授、九大・楠田雅彦助教授、東北大・平野睦男講師、慶大・小林俊文、河上征治両講師、東北大・高林俊文、慶大・牧野恒久両経理担当などの出席のもとに開催された。

まず鈴木班長より、心身障害母体体因研究班全体の説明と不妊分科会に期待する点が述べられた。次いで厚生省稲葉氏より近年の不妊治療の発展と治療結果の慎重な検討が一般より望まれている点が強調され、将来 *in vitro* における生命の初期発生の取り扱いの法的解釈の基礎となるような研究成果を期待する旨が述べられた。さらに慶大・飯塚分科会長の司会のもとで各研究協力者の当面の研究目的が述べられた。

この中で東大・大野教授は不妊治療の一つであるヒトの人工授精で出生した児の長期追跡研究の意図が述べられ、九大・楠田助教授も不妊治療の効果、配偶者間人工授精(AIH)の治療効果の検討などを中心とした研究目的が述べられ、とくに飯塚分科会長よりゲスターゲン療法の結果の検討が要望された。一方・帝京大・和久教授は臨床上の停留睾丸を中心とした造精機能を基礎・臨床の両面から検討する研究目的が説明され、東北大・平野講師からは不妊治療により妊娠、出生した児の発育の程度を多方面から検討する旨が述べられた。最後に厚生省・川口氏より本分科会が生殖生理学の一研究にとどまらず、生命の初期発生を医学、社会学の両面から充分検討して将来の医療の施策上にも貢献する成果が得られるように期待する旨が述べられた。

このあと同ホテル42F、津久井の間にて懇親の機会がもたれ7時過ぎ散会となった。

不妊分科会の第2回の打ち合わせ、研究報告会は昭和55年2月22日(金)、午後2時より東京・新宿、京王プラザホテル42F「御嶽の間」にて班長・東北大・鈴木教授、分科会長・慶大・飯塚教授、帝京大・和久教授・大野教授、九大・楠田助教授、東北大・平野講師、岩手医科大・国本助教授、の各研究協力者、ならびに各共同研究者、高林、牧野経理担当、慶大・小林、河上両講師などの出席をえて開かれた。

本会は鈴木班長の挨拶のあと飯塚分科会長の司会のもとで各研究協力者が以下の研究テーマにつき約15～20分その研究成果を報告した。

1. 人工授精の妊娠、分娩、児の発育に及ぼす影響について
東大 大野虎之助
2. 不妊治療の胎児に及ぼす影響
九 大 楠田 雅彦
3. 不妊治療により出生した児についての発達テスト
東北大 平野 睦男
4. 哺乳類受精卵の腹腔内培養の研究
慶 大 飯塚 理八
5. 睾丸組織での蛋白合成能の測定、とくに停留睾丸固定術と加温による影響について
帝京大 和久 正良
6. 子宮内膜組織中のプロスタグランディンと不妊症
岩手医大 国本 恵吉

これらの報告の中で東大の大野教授は、6才から17才までの人工授精児52例を対象に身長発育状態、学業成績状況などについて調査し、身体の発育状況は厚生省統計の自然受精児に比較して差を認めず、学業成績も体育を除いて他は全て最高の評価を得ていることを報告した。

九大の楠田助教授は、不妊治療の中でプロゲステロン補充療法と諸種排卵誘発剤により妊娠の成立した症例の胎児の予後について追跡調査し、*dydrogesterone* 投与妊娠例では76例中、初期流産10例、子宮外妊娠2例、早産4例、正期産55例、過期産1例、調査時妊娠4例を分析し、児の娩出は60例、内死産は1例、その死因は不明で

結腸狭窄がみられたことを報告した。またHMG-HCG, clomiphene citrate などによる妊娠例では生児獲得率80%, 先天異常率1.4%と報告した。

東北大・平野講師は、不妊治療により出生した児について遠城寺式の発達テストを行ない13例の生児のうち、本テストで三段階を下まわった4例を報告し、症例数を今後追加し、より詳細な分析をすることを述べた。

慶大の飯塚は、体外受精の基礎的検討として、家兎受精卵の腹腔内培養を報告した。家兎受精卵（2分割）を交尾24時間後に回収し、腹腔に留置したDiffusion Chamber（DC）に移し、さらに24時間培養したのち卵の分割を挑め、回収した卵のうち、2分割卵のままのものは3個、4分割卵は1個、変性卵1個を得たと報告した。DCよりの卵の回収率の向上と形態学的にみた卵の分割段階進行の確認は今後の体外受精の臨床の基礎となることを示唆した。

帝京大の和久教授は、睾丸組織での蛋白合成能を加温との関連において研究し、臨床上の停留睾丸固定術の基礎的知見を提供した。とくに睾丸組織は他の組織と異なり、蛋白合成速度は温度の上昇とは平衡せず32℃を境に低下するという。

岩手医大の国本助教授は、黄体形成・退縮とProstaglandinの関連を報告し、切迫流産例における血中HCGの低下とProstaglandinの増加を報告した。

これらの報告のあと相互の討議に移り、今後の検討すべき点も同時に確認された。

続いて班本部の経理担当、東北大・平野、高林両氏により年度末収支決算ならびに報告書の作成上の注意があり、そのあと懇親会に移った。